

関連事項

① 水谷武彦の帰国

大正十五年三月十三日、建築科助教水谷武彦は文部省より満二年のドイツに留を命ぜられた。正木直彦校長より文部大臣に宛てた派遣上申案（從明治四十四年至大正十四年）留學生、練習生ニ関スル書類（庶務）には「派遣ヲ要スル事由」として次のように記されている。

本校建築科ニ課スル建築學ハ勿論一般工業的建築學ニ基礎ヲ置クト雖モ美術的特色ヲ發揮セシムルヲ主眼トシ此點ニ於テ尤モ一般的建築學ト異ル所アリ 斯學ノ授業指導ニ膺ルモノハ最モ深奥ナル研究ヲ積ザルベカラズ 而シテ其研究モ單ニ図書上ニ於テノミ獲取シ得ベキニ非ラズシテ世界ニ於ケル最古最新各種ノ建築物ニ接見シテ實地的研究ヲ遂グルノ要アリ 此主旨ニ因リ右水谷武彦ヲシテ歐洲諸國ニ於テ建築學ノ研究ニ従事セシメントス

同上申書に記された在留希望国はフランス、ドイツ、イギリスであったが、大正十四年度在外研究員については在留希望国を一カ国に限定するよう文部省から指示があったのでドイツ一国となった。

水谷は大正十五年三月三十一日出発。同年七月、ベルリンに到着し、ライマン美術学校に入学して色彩の明るい発色法を習得した。

パウハウスの広告を見て同年九月、デッサウ市のパウハウスを訪ね、グロピウスに会い、教授を紹介され、入学案内をもらった。その後、パウハウス入学を決心して、翌昭和二年二月、ライマン美術学校の成績や履歴書を添えて入学を申込み、間もなく許可された。

水谷は日本人初のパウハウス留学生となり、同年四月から同四年三月まで二年間研鑽を積んだ（水谷が帰国した年の十月に山脇巖、山脇道子の二人がパウハウスに入学した）。在学中に在留期間延期願いと在留国追加願いを提出して認められたが、それはパウハウスの教育課程を完了すること、アメリカで最新建築の見学をするためであった。自筆の「在留期間延期願」（從大正十五年）在在外研究員関係書類（庶務）には次のように記されている。

在留期間延期願

建築學習得ノ必要上昭和三年六月十六日ヨリ拾參ヶ月間御延期願ヒマス

右々“Staatliche Hochschule Bauhaus ni Dessau”ニ入学試験合格 本科生トシテ(1.Semester 約6ヶ月)ヲ終了シタルモ尚ホ(2.Semester, 3.Semester, 4.Semester)〔ノ〕三ゼメスター引續キ本校ニ留ル必要ガアリマス

即チ第一ゼメスターニ於テハ豫備科ニテ一般的ノ教育ヲ施シ第二ゼメスターニ於テハ更ニ高等ナル一般的ノ教育ヲ施シ(或ル一ツノ技術ノ習得ヲ義務的ニ課ス 例へバ実地家具制作術)第三第四ゼメスターニハ建築學ヲ校内ニ在ル教室兼建築研究事務所ニ於テ學ビマス(校内ニ事務所アリテ學生ヲシテ實際ノ仕事ト接セシムルハ本校ノ特色ノ一ナリ)

期限以内昭和三年六月十五日迄ニハ第三ゼメスターニ達スルヲ得ズ 第三第四ノ最モ必要ナル建築教育ヲ得ルヲ困難トシマスカラ拾參ヶ月ノ延期ヲ再ビ御願ヒ致シマス

昭和二年七月

郵便宛先 在獨乙伯林日本大使館気付

文部省在外研究員 水谷武彦

Takehiko Mizutani

水谷は昭和五年一月三日に帰国し、復職した。正木直彦の『十三松堂日記』同年五月二十四日には「午後は水谷武彦助教授久しき留學より歸來したるによりパウハウスに就きての講演を聴聞したり又尋て青山新助教授は最近ペルシヤ メソポタミアトルコ アラビヤの旅行より歸來したるにより旅行談を聞きたり 右終て兩氏の歡迎會を俱樂部にて催したり」と記されている。

水谷は在外研究報告のようなかたちで同年四月の『東京美術学校校友會月報』第二十九卷第一号に「パウハウスはどこにあるか？ どの様な過去を持つか？ その目的は？ その組織は？ そして——『パウハウスのデッサン（絵画素描）』について——簡単に」を寄稿。さらに左記のように一貫してパウハウスで学んだ造型理念と教育を伝えるべく執筆、講義を続けた。

・「新興独逸とパウハウス」(『アサヒグラフ』三三五、三三六号、昭和五年四月九日、十六日)

・「パウハウスと建築に対する主張」(『アトリエ』第七卷第八号、同年八月)

・昭和五年十一月五日より十日間、本校で開催された文部省主催図画講習会で「構成とは」の講義を五日間担当。

・「パウハウスの工作教育(WERKLEHRE)」(『美学研究』第五

輯、昭和六年六月)

・「材料の構成としての手工」(『学校美術』第五卷第七号、同年七月)

・昭和六年八月、本校図画師範科・日本図画手工協会主催により、本校で開催された図画手工夏期講習会で「建築構成」の講義と実習を担当。これは前年の文部省主催図画講習会講義の続きと言える内容であったと参加者の手記にある。

・「構成基礎教育」(一)、(二) (『東京美術学校校友會月報』第三十卷第四号、五号、昭和六年十月、十一月)

・「構成基礎教育について」(『富山教育』二一五号、同年十月)

・昭和七年五月、凸凹第七回展開催中、東京美術学校俱樂部において同団体主催の近代工芸講演会が開催され、森口多里、上野正之助とともに講演した。

・昭和八年八月、学校美術協会主催により、青山師範学校で開催された夏期図案指導講習会で「現代の生活構成と図案」を講演、同年九月、『学校美術』第七卷第九号に講演録収録。

・「パウハウスのカリキュラム」(『美術手帖』八十二号、昭和二十九年六月)

・「20世紀を飾ったBAUHAUS」(『新建築』第二十五卷十一号、昭和三十年十一月)

『近代日本建築学発達史』(日本建築学会編、昭和四十七年、丸善)によると、帰国後、水谷の研究は本校建築科の教育方針にはあまり影響を及ぼさなかったが、学生間には人気があり、学生は水谷を窓口にして国際建築運動の影響を受けた。水谷の造形理論については、

折衷様式的建築教育を受けた大沢三之助、岡田信一郎、森井健介らは、感覚的には理解しながらも共鳴しなかったようだという。

水谷は帰国後、本校建築科に開設された「構成原理」の授業を担当し、その色や形の構成から始まるバウハウス流デザイン教育はその後の学生たちの仕事に大きな影響を与えた。

建築科を昭和六年三月に卒業した吉村順三氏は別冊『新建築 吉村順三』（昭和五十八年十一月）で次のように回想している。

水谷武彦先生がバウハウスから帰ってこられたんです。これは非常な刺激になりましたね。何しろ岡田先生は明治生命館でもわかるように、クラシックな様式主義者でしたからね。水谷先生に教わるようになり、やっと新しい時代の息吹を感じました。たとえば水谷先生は紙を持ってきて、これで何か作品をつくれというんです。それまでなかったことです。戸惑いましたね。今では小学校でやるようなバウハウスの教育なんです。はじめてのやり方でしたからね。紙を切つてはいけない、のりを使つてもいけないというので、私は薄美濃をたくさん折つて、その上に土びんをのせられるくらい立体的なものをつくつて、先生にほめられたのを覚えています。

——水谷武彦先生はどういう感じの方でしたか。

水谷先生はいまいましたように、ドイツのバウハウス帰りでしたから、岡田先生とは対照的で、国際的でしたね。そういえば私は、水谷先生のおかげで卒業できたようなものだったんです。

——というのは？

私が卒業設計で選んだテーマは、最小限住宅でした。最小限住宅といっても当時のことでしたから二〇坪ぐらいでしたね。ところがそのころ、卒業設計といえば皆大きな建築の設計をやるのが常識で、住宅などというのはなかったんです。それで学校では、そんな卒業設計では卒業させられない、というわけです。水谷先生だけが設計の意図を理解して下さり、非常にサポートして助けてくれたのです。

——どのような設計でしたか。

新しい住宅のスタンダードのあり方を提案しようというもので、全部組立て式乾式工法の住宅で、椅子がすべて壁に引っ掛けられるようになっていました。そのころから家具もいっしょに設計したんです。学校からならまれたわりには評判がよく、方々の展覧会に借り出されていきました。アイ・シー・オールの間誌にも載せられたんです。

昭和五年十月に朝日新聞社ギャラリーで東京大学、早稲田大学、京都大学、本校の学生が新しい住宅問題に対する研究発表会を催した。その際、本校建築科学生は三年生以上が参加して生活最小限住宅を提案、それは『建築新潮』第十二年第四号から第六号（昭和六年四月から六月）に写真図版と制作過程が紹介され、翌六年に、『建築新潮』や『アイ・シー・オール』の発売元である洪洋社から『東京美術学校創美会共同製作 生活最小限住宅』が刊行された。これは水谷の指導のもとに実現したテーマであった。水谷の帰国によって建築科学生の研究に変化が起き、評価を受けたものと言えよう。

研究発表会出品建築科生徒共同制作
集合住宅 昭和5年10月（梅田良雄氏提供）

水谷武彦と生徒（同氏提供）
左より疋田玄二郎、村松作二郎、水谷武彦、
梅田良雄、吉村順三

建築科を昭和七年に卒業した天野 正治氏は、編者の質問に対して次のように語った。

水谷の授業は、建築というよりその原点についての事柄であった。形の問題、例えば一枚の紙を課題として出して、折りたたんで人が乗っても大丈夫のようになりまい具合にする、ある固さをもたせる折り紙をやった。そういつたことを自分で考え出すということが大きい問題で、物の構成を一つの問題から考え出すのだった。学生の考えを引き出すという姿勢であったと思う。ドイツで折り紙をして向うの人を驚かせたことがあったという。『バ

ウハウス』という雑誌に水谷の作品が載っていたが、それは切らずに紙をたたんで折って立体にしたものだった。自分たちはただただ新知識に期待していたのだが、具体的なことは教わらなかった。ノートをとるような授業ではなかった。

同じく建築科を昭和七年に卒業した梅田良雄氏は編者の質問に対して次のように語った。水谷先生が帰国するとき、学生は『パウハウス』という本に書いてあるような講義をやってくれるのだろうかという期待をした。主任教授の岡田信一郎先生がもう少しラシックでギリシャやイタリアの建築様式を教えておられるところへ水谷先生はパウハウスを勉強して帰ってこられたのである。先生からノイエ・ザハリッヒ・カイトを学んだ。素材、材料そのものの良さを表現するということ、例えばタイルを貼ったり塗ったりしない、コンクリートをうったまま、仮枠を外したままの面、つまり素材そのものを生かした建物を設計するのだった。これは日本の建築設計、様式になかったものである。ワルター・グロピウス、マルセル・ブロイヤールといった建築家の手法、理論——素材だけの面、それがデザインになる、飾らない、石なら石だけの面の美しさ——を講義した。非常に驚いた。その影響を受けたのが吉村順三氏で、氏は水谷先生のインターナショナルの建築設計様式を、パウハウスの建築理論を一番まとめた人、もっとも代表的な、もっとも傑出した人と言えると私は思う。他の建築家が及ばない、もっとも優れたデザイナーである。僕は他の科の何人かの友人にも、水谷先生の講義を聞きにくるよう勧めた。その一人、内田邦夫（昭和十年、工芸科鍍金部卒業）は先生の講義を一緒に聞いてデザインの基礎構成理論を学び、それ

が一生の作品を支配した。帝展に入選する作家となったが戦後に日展と訣別して、水谷先生の理論にヒントを得て、そのアイデアで、クラフト運動を始めたのだった。これはバウハウスに通じるものだ。私が水谷先生の講義を聞かせたから、死ぬまで私を恩人だと言っていた。他の科から建築科の「構成原理」を頼んで聞きにきた人は他にも誰かいたようだ。

昭和八年に建築科を卒業した石川恒雄氏は「私の受けた建築教育」（『建築雑誌』第九十一巻第四号。昭和五十一年四月）で、水谷から「新しい造型芸術家達の構成原理の解説を聞くことは大変興味深かった」とし、当時は近代住宅の転換期で、当時はまだ、岡田信一郎が講義で「最近縁側に硝子戸を設けるようになった」などと話していた頃で、一般庶民住宅は畳の間が主体で、家具を配置した住居型成のものは少なかったが、そこに、住の問題、集合住宅の問題を人間の原点から考え直し、その容器の型成を考え直して行こうという風潮が生まれつつあったという。この新しい風潮のもとで、水谷の近代住宅への発想は、具体的な資料には乏しいが、学生に与えた影響は少なくなかったのではないか。勝村謙一「日本のデザイン国際交流史」（『Design Scene』十八号。平成二年七月）によると、水谷はバウハウス留学の最後の六ヶ月間を建築コースに学び、主任教授のマイヤーとシュタム等が外部から委嘱されていた都市計画、集合住宅の仕事にも参加し、直接現場での実習も行なっているというから、新しい住宅建築に関する造詣は相当深かったと考えられる。彼はバウハウスに出発する前の大正十三年に、早稲田大学大隈講堂の設計コンペで二等賞に入選した以外は建築家としての顕著な

業績はないようだが、ご子息の千晴氏によると、水谷は家では恐らく個人住宅と思われる設計の図面はよくひいていたという。

昭和十一年に建築科を卒業した大沢三郎氏は「私の受けた建築教育」（『建築雑誌』同前）に、「私が〔水谷先生から〕受けたものはその新しい空間やテクスチャー感覚をもとにした造形教育であった。テクスチャーの概念を理解する為の初歩訓練で、色々な材料を収集して来てその表面の平滑なものから粗面なもの迄も段階的に並べさせたりするのは有名である。しかし芸術と「わざ」の統一を目指す此のバウハウスの教育理念を当時は十分に理解することが出来なかった」と記している。

帰国から数年を経ても、バウハウスの教育を受けた水谷への学生の期待は高かった。昭和十五年に図案科を卒業した小山清男氏は、編者の質問に対して、次のように語った。先生にバウハウスの話を何とか聞きたかった。バウハウスという言葉は知っていたが、図案科では先生の講義は聞けなかったもので、どうしても聞きたいと広川松五郎先生に頼み、実技のある土曜日の午前中に特別講義をコマ設けていただいた。昭和十五年卒業生が三年生の頃のこと、図案科一学年全員が一年を通じて講義を聞いた。建築科にしかない「構成原理」という講義のタイトルにひかれ、原理的なことを聞いた、バウハウスについて知りたいという熱意からだった（他に建築科の構成原理をもぐりて聞いていた者もある）。水谷先生の授業は、散文化的な講義だった。バウハウスの理念を大系的に話すというのではなく、バウハウスでの体験談、バウハウスの説明、展覧会の見聞談、そのディスプレイのことなど具体的な話だった。雑誌でちらち

ら見るものがあつたシュールレアリズムの話を初めて直接聞いた。そういう話は他の先生は誰もしないから、新鮮だった。難しいという印象はないが、ノートがとりにくい授業であつた。水谷先生の造形理論の本を欲しかったが、まとまつた著述はされなかつた。パウハウスは基礎教育の面で効果はあるが発展は難しいと思う。

また、昭和十六年に工芸科鑄金部を卒業した飯田泰造氏によると、パウハウスの構想を聞こうと、鑄金、彫金の学生が自主的に建築科の水谷のもとへ集まつていた。戦時体制がとられ金属がなくなりつつある状況になつて、コンクリートを素材にする研究が進み学校でも実践された折りから、機能派という何でも使おうという考え方や素材の活かし方について水谷から話を聞いたのだが、水谷の話から伝統的なものが洗練された外国の息吹を感じとつたという。

水谷はその後昭和十九年に一旦本校を退職したが、二十四年から四十年まで東京芸術大学非常勤講師として「構成原理」を講じた。

② 岡田三郎助の渡欧

昭和五年二月二十八日、岡田三郎助は文部省より欧州各国への出張を命ぜられた。出張に関する上申案（昭和五年職員関係書類^{庶務}）には次のように記されている。

案

教官ヲ外國ニ出張セシムル件上申

官氏名 東京美術学校教授（勅任）岡田三郎助

出張地 伊太利國、佛蘭西國、獨逸國、土耳其國、

出張期間 昭和五年四月初ニ出發シ同年九月末還歸スル豫定ニテ
約六ヶ月間トス

出張ノ目的

岡田教授ハ今ヨリ三十餘年前ノ壯時ニ於テ官命ニ依リ四ヶ年間佛蘭西國ニ滞在シ西洋畫ヲ研究シ歸朝後本校教授ニ任ゼラレテ現在ニ至ル 現代西洋画家中屈指ノ巨碩ナリ 近ク十年來我繪畫界ニ勃興セル壁畫ノ研究ニ就テモ同教授ハ夙ニ熱心ナル思索家タリ 現時歐洲各國ニハ其中古ニ偉大ナル發達ヲ為シタル壁畫ノ遺跡ヲ完全ニ保存セルモノ尠カラズ 壁畫研究者ハ親シク之ヲ目覩スルニ非ラザレバ其思索考察ヲ進捗セシメ難キモノアリ 是今回同教授ニ歐洲出張ヲ命ゼラレタキ理由ナリ

出張旅費 本校々館費ノ内ヨリ支給ス

右記載ノ如キ事情ナルニ付岡田教授ニ歐洲伊、佛、獨、土ノ四ヶ國ニ出張ノ御發令相成度此段上申候也

年月 日

學校長

文部大臣宛

岡田は同年四月十九日出発（43頁校友会月報記事参照）パリに暫く滞在して三井家の依頼画を制作し、その後大橋了介を伴つてバルカン諸國、イタリアを旅行した。バルカン旅行については自ら「バルカン地方旅行談」（『東京美術学校校友会月報』第三十卷第一号）に詳しく記しており、また、大橋了介著「岡田先生のお供をしてバルカンと伊太利へ」（『画人岡田三郎助』昭和十七年、春鳥会）にはバルカン、イタリア旅行における数々のエピソードが記されている。それらによる